【研究論文】

ジェンダー・フリーの価値観育成を目指す保育

石　倉　瑞　恵

要　旨　保育施設における幼児のジェンダー化の構造を明らかにし、ジェンダー・フリーの保育を目指す上での留意点を指摘した。保育者のジェンダー観は、生活・遊びの環境整備、保護者との対話の中に表象される。ジェンダー化された環境の中で、幼児は、男／女の中に自己を位置付け、男女の文化を対立的に把握し、男らしさ、女らしさを認識するようになる。保育者は、幼児を個として捉え、保育環境に多様性をもたせるように留意する必要がある。

abstract

The author clarified the structure of genderization of children at child-care facilities, and indicated points to remember in the course of efforts to achieve gender-free child care. Child-care workers' views about gender are presented in the environmental arrangements of life and play and the dialogues with guardians. In genderized environment, children position themselves in male or female, confrontationally grasp the sexual culture, and recognize masculineness and femininess. Therefore, child-care workers should take children as individuals and diversify the child-care environment.

はじめに　―ジェンダー・フリー教育の意義―

「ジェンダー・フリー」とは、1995年に東京女性財団が提起したことばである。このワードは、ジェンダーの重荷に対する認識を人々に促し、人々がその重荷から解放される社会を築くという使命によって登場した。日本には、高度経済成長期以来「男は外、女は内」という価値観が根強く定着してきた。景気が上昇する中で、男性も女性もこの重荷を背負って日本経済を支えてきた。同時に、人々は、この重荷こそが自己存在の証であるという錯覚に陥った。男性は、自己のアイデンティティのために、身を粉にして稼いだ。女性は、自己のアイデンティティのために、男性の労働と家庭を支えてきた。近年、人々はこの重荷が自己のアイデンティティではなく、まさに単なる重荷にすぎなかったと気付き始めている。団塊世代の男性を支えてきた女性が、熟年離婚を決意したり、韓国ブームの担い手となっているのは、その一つの表れではないだろうか[1]。

個人の幸せを導くためには、当然と思いこまれている価値観、人々の重荷となっている価値観から人と社会を解放しなければならない。多くの教育思想家が考えていたように[2]、幸せとは、個人が自らの意思によって、また自らの足を地につけて生活することである。漠々とした価値観に流されて生きるのは幸せではない。そして、教育とは、人の幸せを導くことをその使命とする。筆者は、人々の幸せを導く教育に携わる者として、今の日本社会にはジェンダー・フリーの考え方を追求し、広めることが必要であると強く感じている。

ジェンダー・フリーとは、単に男性と女性をそれぞれの性役割から解放することを主張するのみならず、様々な価値観と心情的な領域を共にするものである。例えば、人種に対する偏見から人々を解放する価値観と同質なのである。なぜなら、ジェンダー・フリーの考え方は、性差を手がかりとして人を認識しない視点、すなわち、人を「個」として見なす視点を育成するからである。つまり、自分とは異なる人をそれぞれの人生を生きる主体として尊重する視点を育成するのである。日本に住む子どもにとって、性差は人種の相違よりも身近である。ジェンダー・フリーの視点は、様々な次元において「人＝個」であるとみなす価値観への基礎となると考えている。

日本において、ジェンダー・フリーは広い理解を得ているとは言いがたい。しかし、教育の場には、人々のジェンダー理解を導く大きな可能性がある。そして、教育の第一ステージである幼児教育は、ジェンダー理解の第一歩を提供するという重責を担っている。本稿では、幼児期、及び保育施設におけるジェンダー化の構造を明らかにし、ジェンダー・フリー保育の可能性について論じる。

1　日本におけるジェンダー観

日本における人々のジェンダー観は、どのようであろうか。

性役割に疑問を感じる女性は少なくないが、この疑問をジェンダーの問題として積極的に問うていこうとする女性はまだ多くない。また、女性であるがために差別を受けていても、そのことに気がつかなかったり、気がついていても当然のことであるとさえ思ったり、逆にその状態こそが女性にとっての幸せであると思いこんでいる女性も少なくはないであろう。

一方、男性は、ジェンダーの問題には女性ほど関心がない。彼らは、ジェンダーの問題を、女性が自らの性を解放するために切り出す視点であるとみなす傾向にある。性役割から解放されて幸せになるのは、必ずしも女性ばかりではないのであるが、自身に与えられた性役割をあえて疑問視しようとする男性は少ない。重荷こそが自己のアイデンティティであると錯誤している男性は多い。

研究者の中にすら、ジェンダー研究を女性研究者の研究テーマとみなしている男性に遭遇することがある。ジェンダー論は、特定の分野、例えば教育学や社会学が論じる分野であって、その他の分野には全く関係がないと考えている人々もいる。ジェンダーの視点を切り出すと、とたんにノーコメントとなる男性研究者のいかに多いことか。

さて、日本人の性役割に対する意識を数値の上で見てみることとする。2006年度、内閣府が「少子化社会に関する国際意識調査報告書」を公表した[3]。日本、韓国、アメリカ、フランス、スウェーデンの５ヶ国間で行った意識調査報告である。ここには、日本では、家庭を守る、育児をするといった仕事を女性のものとみなす割合、そして、それらの仕事を実際に女性のみが担っている割合が極めて高いことが示されている。

まず、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という項目に対して、賛成を示している割合は、日本が57.1％と５ヶ国の中で最も高い[4]。この項目に対する賛成の割合が最も低いのがスウェーデンで、8.6％である。一方、この項目に反対を示した割合が最も高いのが、スウェーデンで、90.7％である[5]。反対を示した割合が最も低いのは、日本で、37.3％であった。

次に、「就学前の子どもの育児における夫･妻の役割」に関する項目についてである。これらの役割は主に妻が行うと答えた割合が最も高いのは、韓国の67.9％であるが、日本もほぼ同様の数値で66.8％となっている[6]。この項目においても、スウェーデンは、妻が行うと答えている割合が最も低く、6.8％であった。スウェーデンでは、妻も夫も同じように行うという回答が多数であり、92.4％であった。（日本では、この回答が31.2％）

この調査が提示している問題は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」と考えている人々が非常に多いことである。すなわち、日本では、性役割を認識しつつも、問題視しないばかりか、正当化する傾向が高いということである。

2　ジェンダー観形成における保育施設の位置付け

就学前の段階において、幼児は基本的なジェンダー観を身につけると考えられる。今まで、学校教育は、中学校段階における家庭科共修などにとり組んできたが、ジェンダー・フリー教育の重点化段階は、ジェンダー観の基礎を築く幼児教育にあると考えられる。

佐藤（1984）は、子どものジェンダー観は就学前の段階において大きな変化を強いられると指摘し、次のような例をあげている。「例えば、３歳児では、男の子も赤いリボンを付けてもらいたがる。『ワー、かわいいわね』と周囲でほめると、何となくそぐわないイガグリ頭の子でも、得意になって嬉しそうな顔をする。しかし、年長組の子がそれを見つけると、『なんだ、男のくせに！』とすぐやる。非難された３歳児の男の子は実に悲しそうな顔をする。[7]」すなわち、３歳児では、「赤」や「リボン」を女児文化として男児文化から排除する価値観はできていないが、年長児に至るまでに女児文化と男児文化の概念を形成することが示唆されている。「遊び」に性別ができるのも、年少児以降である。「ままごと」は、年少児までは男児にも大人気の遊びであるが、年中児以降、ままごとコーナーに男児を見ることは少なくなる。

幼児は、どこでジェンダー観を形成するのであろうか。子どもの価値観形成には、家庭、特に親の価値観、言動が大きく影響する。しかし、保育施設の影響力には、親の価値観すら無力となるような力のあることが、次に示す「少数派」の親の例から明らかとなる。

「・・・この父親は、自分の娘を自立した女に育てたいと願い、幼児期から、ことさら《女》というこ

とを言わずに育てたが、幼稚園は娘を『まさに女に仕立てた』と言うのだ。『親の力は《世間》を代表する幼稚園、それに続く学校教育の中で培われる《常識》と比べれば、実に小さい』と嘆く。」[8]

「・・・仕事をもつある母親は、自分の息子を、『女性も独立した人格をもつ人間である』という見方をもつ人間になってほしいと願って育ててきた。その息子が、小学校に入って間もなく、ある日、母親に向かって言ったという。『なんだ女のくせに。』そのとき思わず力が萎えた、とその母親はいう。」[9]

このように、幼児のジェンダー観には、保育施設が大きな影響を及ぼしているのである。そこで、保育施設におけるジェンダー観形成のメカニズムを明らかにしようと試みる。

3　学校教育においてジェンダー観を形成する隠れたカリキュラムの構造

ジェンダー観は、教育の場において「教育知」として伝達されるものではない。階層や人種、そしてジェンダー等に関する価値観、規範、行動様式を伝達するプロセスは、教育を始めとする様々な社会化の場面に暗黙として潜んでいるものである。いわゆる「隠れたカリキュラム」であり、見過ごされやすいが、その効果は非常に大きい。森（2003）は、学校教育における隠れたカリキュラムの構造を図１のように示している。隠れたカリキュラムの場は、大きく三つからなる。第一に、学校外において生徒の価値観を形成する場、すなわち、親やメディアである。第二に、教室における教師の社会観・教育観、及び教師と生徒間の相互作用である。第三に、学校という環境である。学校の組織構造・学校文化、行事・儀礼から教科書・教材に至るまでの環境が含まれる。

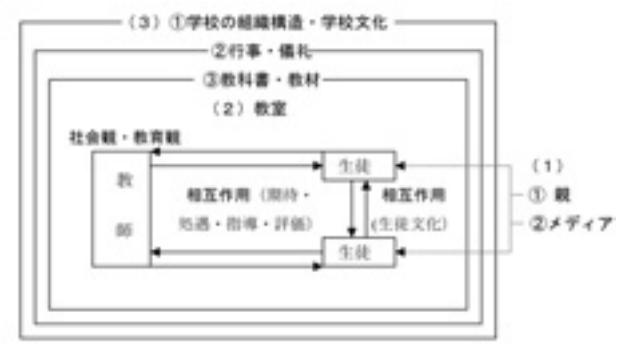

図１　学校における隠れたカリキュラム

出典：森繁男「教育におけるジェンダー」、岩永雅也、稲垣恭子『教育社会学―教育の社会的意味とその変容―』放送大学教育振興会、2003年、119頁.

この三つの場におけるジェンダー化のプロセスを先行研究に基づいて例示し、隠れたカリキュラムの構図を顕在化してみる（文中の（1）、①等の記号は図１中の記号と対応）。

（1）学校外において生徒の価値観を形成する場

①親の子に対する期待、親自身のジェンダー観は、日常のささいな言動の中に表現される。例えば、「男の子だから泣いてはだめ」、「女の子だからやさしく」などという言葉がそうである。また、衣服や文房具等の身の回りの物に選んだ色、種類等によってもジェンダー観は伝えられる。

②メディア、すなわち、テレビ、ビデオ、ゲーム、インターネットなどは、直接的、間接的に子どもの価値観を方向付ける。「間接的に」というのは、親もまたメディアの影響を受けるからである。メディアには、ジェンダー・バイアスが多く含まれるにもかかわらず、人々はそれに気付かないことが多い。例えば、ニュースでは男性キャスターがメインとなる番組が多かったり、子どもが事故に遭ったニュースなどには、父親の名前のみが公にされたりするが、その不自然さに気付くことはあまりないであろう[10]。男性主導社会の構図を受け入れる思考は、このような情報を無意識のうちに受容することによって成立するのである。又、ドラマやアニメ、コマーシャルなどを、主人公、登場人物、男女比、職業、年齢を基に分析すると、典型的な男らしさや女らしさが描写されていることがわかる[11]。人々がドラマ等を楽しんでいる無防備な意識の中に、男らしさや女らしさがインプットされるのである。

（2）教室における教師の社会観・教育観、及び教師と生徒間の相互作用

生徒は（1）で習得した価値観をもって学校に集まってくる。教室では、生徒間の相互作用、および教師との相互作用の中で、主流の男子文化、女子文化が強化される。

この相互作用の中で、教師の社会観や教育観、ジェンダー観はとりわけ大きな影響力をもつ。例えば、「男子、女子」という無自覚に口を出てくる呼びかけ[12]に始まり、整列、名簿等様々な場面において、まずは男子と女子とに分類する文化の中で、生徒が抱いていた男子と女子の境界線は、一層明確になる。又、教師は、授業中に男子生徒に多く働きかける傾向があると指摘されている[13]。それは、男子の方が騒々しい存在である上に[14]、心理的繊細さを欠いて

いるため、クラスの面前で一人にスポットを当てることが容易であると把握されているからである。しかし、男子は、授業空間における学習主体として優位的位置に立つことができるのである。

（３）学校環境（学校の組織構造・学校文化、行事・儀礼、教科書・教材）

①例えば、教員の男女比、生徒の男女比は、生徒のジェンダー観に影響を及ぼす。一般的に、日本の教育機関においては、年少の教員に女性が多く、教育段階を上がるにつれて男性教員が多くなる傾向にある。教科では、国語や英語、音楽、家庭科に女性教員が多い。また、校長、教頭や主任などの管理職には、女性が少ない[15]。これらの特色は、生徒のジェンダー観に影響を及ぼすと共に、男性主導の社会を容認する意識を育むこととなる。

②卒業式で、男子生徒から名前が呼ばれる等、行事、儀式では、男女の別が徹底され、男子生徒が優先されていることが多い。これは、男性主導の社会を容認する意識へと結びつく。

③教科書や教材には、伝統的ジェンダー観に基づいた価値観が示唆されていることがある。国語の教科書では、男性作者による作品が多く用いられている。これらの作品では、男性が主人公となっていたり、登場人物に伝統的な男性像、女性像を描いている場合が多い[16]。

男女共修となった家庭科においてでさえ、父親が保育園へ子どもを送迎している写真を載せた教科書は、「保育園らしくない」という理由で検定において修正を指示されたと言う[17]。また、理科の教科書では、実験の説明をする役割には男子が描かれ、説明を聞く側には女子が描かれる場合が多い[18]。教科書は、それぞれの教科の「知」を伝達するのみならず、生徒が、男性主導社会の構図と古典的ジェンダー観を吸収する機会を多く提供しているのである。

４　保育施設においてジェンダー観を形成する隠れたカリキュラムの構造

図１「学校における隠れたカリキュラム」の構造を基に、保育施設における隠れたカリキュラムの構造を示したのが、図２である。図１と異なっているのは、保育施設では、絵本やおもちゃ（図１の教科書・教材に相当）を選ぶのが保育者であるため、「（２）保育室」に位置していることである。（１）保育施設外において幼児の価値観を形成する場、（２）保育室における保育者、幼児の価値観、および相互作用、（３）保育施設の組織構造・文化、行事・儀礼、それぞれの場面におけるジェンダー化のプロセスについて例をあげて示す（文中の（１）、①等の記号は図２中の記号と対応）。

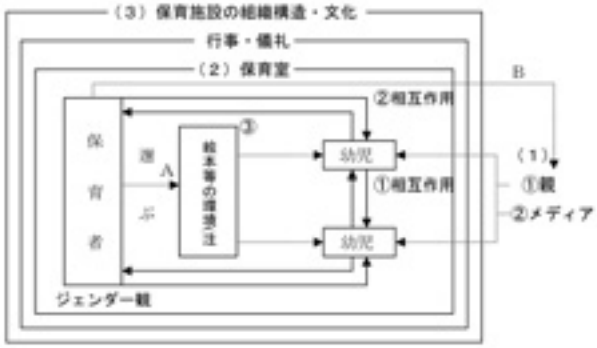

図２　保育施設において幼児のジェンダー観を形成する隠れたカリキュラム

注：「環境」には、おもちゃ、絵本等の遊びの環境と生活の環境を含む。

（１）保育施設外において幼児の価値観を形成する場

①親の言動がジェンダー観を伝達することは、３（１）①で述べたとおりである。しかし、親自身も子の成長に伴い、次第に子に対する期待を確立していくのである。なぜなら、親自身が、男児は男児の文化圏へ、女児は女児の文化圏へと育てる方向性の中に置かれているからである。例えば、親が子どもの衣服を選ぶときに、男／女の壁に突き当たる。男児の下着にピンク色やハローキティ柄を見つけることは不可能である。また、男児にピンク色の服を着せていると、「女の子みたいね」「そのうちピンクがおかしいと思うようになるから（大丈夫）」と言う人々に出会う。親の周囲には、子に対する価値観、期待の「逸脱」を許さない環境が成立しているのである。

②幼児期に影響を及ぼすメディアは、主としてテレビ、ビデオ等のアニメや子ども向け番組である。アニメは，男児を視聴者に想定したものと、女児を視聴者に想定したものとの間に、人物描写、ストーリー展開において相違がある。男児向けアニメでは、男子の登場人物が多く、女児向けアニメでは、女子の登場人物が多い。登場人物は、「らしさ」を強調して描かれているため、男児は男らしさに、女児は女らしさに憧れを抱く。また、女児向けアニメを起用したおもちゃの宣伝等では、女児が登用されており、女児向け番組への「男児禁制」が暗示されているのである。男児向けアニメにおいても同様のことが言える。

一方、中性的と思われるようなアニメにおいても

（例えば、アンパンマン、ポケットモンスター、ドラえもん、クレヨンしんちゃん）、主人公、登場人物の描写、ストーリー展開にはジェンダー的偏りが見られる。このようなアニメでは、男子が主人公となる場合が多く、全体として男子の登場人物が多い。男子は男らしさを強調して描写されており、女子、特にヒロインは、女らしさを強調して描写されている。アニメは、幼児にジェンダー化への憧れの機会を多く与えているのである。

（２）保育室における保育者、幼児の価値観、及び相互作用

①各家庭でジェンダー観を身につけ始めた幼児は、保育室において相互に影響を及ぼしながら、主流の文化にまとまりはじめる。人と異なることを好まない日本文化の中では、その傾向が強い。女児向けアニメキャラクターが好きな男児は、周囲から「異なっている」ことを指摘され、男児主流文化圏への「改宗」を迫られる。ままごと遊びの好きな男児も「戦いごっこ」などの男児の遊び領域に改宗せざるを得ない。

②男児と女児が、自分達の文化圏に改宗していく様を目の当たりにした保育者は、ジェンダー観を再構築する。「やはり女児はままごとが好きで、男児は活動的な遊びが好き」というふうにである。保育者と幼児の間の相互作用は、男／女の文化的対立化と男女それぞれの主流文化圏への結束とを促すのである。

③保育者は、自身の価値観、ジェンダー観を幼児との直接的なやりとりの中でのみならず、保育環境の中にも表出し、幼児に影響を及ぼしている。保育環境への保育者のジェンダー観の表象については、次項５で詳細に検討するので、ここでは幼児向き絵本について、ジェンダーの視点から、その特性を述べておく。保育者が絵本を選ぶプロセスには、保育者の価値観が影響するが、多くの絵本には、挿絵やストーリーの中にすでに伝統的なジェンダー観が表現されているからである。絵本を、ア. 登場人物・著作者の性別、イ. 主人公の行動・遊び方、ウ. 子どもの周囲に描かれているもの（身につけている物、小道具）、エ. 登場する大人の家庭での役割、の基準で分析すると、偏った傾向があることがわかる[19]。ア. 男性作者の場合には、男子が主人公になっている場合が多い。イ. 男子は、活発に描かれていることが多い。ウ. 男子の持ち物には、車などが描かれていることが多い。エ. 母親が登場する場合、その行動は、育児、家事のための行動であることが多く、一方、父親が育児や家事をしている行動が描かれることは少ない。男性主導社会の構図や男らしさ、女らしさは、幼児への物語を通して伝達されるのである。

『赤ずきんちゃん』、『三匹のこぶた』、『もも太郎』など、子どもが必ず一度は目にするような昔ながらの物語には、これらの傾向が顕著に表れている。近年は、伝統的な価値観や偏見の表出に問題意識を抱く作家が、新しい価値観を伝達することにとり組み、新たな傾向性のある絵本を出版している。ジェンダー観についてはどうであろうか。近年出版された新しい価値観を含む絵本を見てみる。例えば、デビッド・マッキーによる『ぞうのエルマー』シリーズである[20]。この絵本は、主人公の象エルマー ――普通の象とは異なったカラフルなパッチワーク柄の象が、自分だけ異なっていることにコンプレックスを抱きながらも、仲間の象にその個性が受け入れられ、明るく楽しく過ごすというストーリーである。「他者と異なっていることの素晴らしさ」を伝えようとしている絵本である。しかしながら、活発で明るく機転の利くエルマーは「ぼく」として語る。エルマーのいとこのウィルバー、白黒のパッチワーク柄のいたずら好きな象は、やはり「ぼく」として語る。メイン・キャラクターは、いわゆる男性的性質の雄象なのである。また、第一人称で語っている動物の会話に着目すると、他の象や動物もすべて「ぼく」であることがわかる。「他者と違うことの素晴らしさ」を理解することには、人種に対する差別的なまなざしを克服する等の意図があるものの、この絵本には女性が排除されているのである。

（３）保育施設の組織構造・文化、行事・儀礼

女性保育者は、圧倒的に多数を占める。また、保護者を伴う行事の際には、母親が中心的な役割を果たす場合が多い。保育施設の組織的特徴や行事は、主に女らしさや女性の役割を幼児に伝達している。

５　保育者のジェンダー観の表象と幼児への影響

図２に示した３つの場面の中で、「（２）保育室」に着目し、保育者からの矢印Ａ. Ｂについて詳細に検討する。

保育室においては、保育者が幼児に与える影響は大きい。なぜなら、保育者の価値観は、幼児との相互作用の中においてのみならず、A. 生活と遊びの環境整備、B. 保護者との対話の中にも表象されるから

である。そこで、環境整備と保護者との対話の中に表れる保育者のジェンダー観とその幼児への影響について、事例に基づいて考えてみる。

以下の分析は、愛知県下の市立C保育園年長組における6ヶ月の観察（平成19年4月～9月）に基づいている。（1）生活環境の整備、（2）遊び環境の整備、（3）保護者との対話の三点について、保育者の価値観の表象と幼児への影響に関する分析を行った。

（1）生活環境の整備

年長児の保育室では、「自立」を考慮した工夫がとり入れられている。その中で、強くジェンダー観を表象していると思われたのが「色わけ」である。ロッカー、靴箱にはられている幼児の名札は、男児の場合は水色、女児の場合はピンク色に分けられていた。（年少児の場合は、色と形を組み合わせた名札である。男児では、水色とトラックや車などの形が、女児では、ピンク色と花などの形が組み合わされている。）給食とおやつ用のナプキンを入れる籠、歯ブラシを立てるコップ、うがい用のコップ置き場、プールカード入れ、水着かばんを置く場所、全てが男（水色）／女（ピンク色）で分類されている。夏季昼寝用蒲団は、男女混合で置かれている。蒲団は保育者が広げるためである。すなわち、幼児が自分の持ち物を認識し、整理する手段としての感覚的分類基準に、男（水色）／女（ピンク色）の別を用いているのである。このような生活環境の中で、幼児は、自己の持ち物を認識する毎に、男／女の中への自己の位置付けと、色の性別化というトレーニングを行うことになる。

（2）遊び環境の整備

遊びの例として、父の日のプレゼント作成という活動を分析する。父の日のプレゼント作成活動は、表1に示したとおりである（完成図は図3）。

表1　プレゼント作成活動の例

テーマ	父の日のプレゼントに小物入れを作成
材料	牛乳パック（半分にカット済み） 青、緑、肌色の画用紙 黄、緑、青色の小さい色紙 クレヨン
作成のプロセス	①牛乳パックの側面に青か緑色の画用紙をはる。 ②肌色の画用紙から顔と手を、青か緑色の画用紙からは腕の形を切りぬき、顔には父の顔を描く。 ③顔と腕、手を箱の上部と左右に糊付けする。 ④保育者の用意した「折り方」を見ながら色紙でネクタイを折り、牛乳パックの前面に糊付けする。

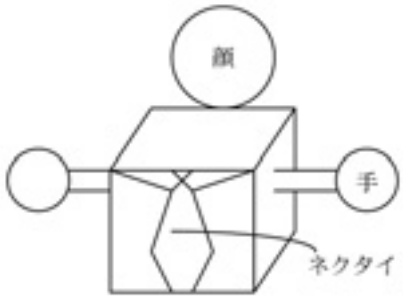

図3　小物入れの完成図

この活動には、いくつか評価すべき点がある。第一に、幼児が図と文字で記された「折り方」を見て、折り紙をすることである。単に、身近なものを折り紙で表現するのみならず、図形や文字を理解し、表現するというプロセスが、配慮されているからである。また、切る、はる、描く、折るという様々な活動をとり入れて、人物を立体的に表現するという配慮のある点も評価できる。

しかし、ジェンダーの観点からは、大きな問題点が浮かび上がる。第一に、幼児が各々抱く父に対するイメージを鑑みずに、保育者の父に対する既成概念が押し付けられている点である。すなわち、「父＝ネクタイを着用したスーツ姿のサラリーマン」というステレオタイプの押し付けである。第二に、父親の衣服が、青か緑と決められている点、すなわち父の色として赤やピンクは除外されているという点である。保育者が抱く色の性別基準が適用されている。結果的に、幼児が作ったプレゼントは、ほぼ同一の個性の少ない父親の姿となった。この活動では、幼児が一定の父親像、男性像を学習するという側面が強い。

（3）保護者との対話

保育者が日々保護者に対して行う報告の中には、ジェンダー観を伝達する機会が潜んでいた。例えば、「男児はみんな《戦いごっこ》が好き」、「男児はトランプなどのゲームが好き」「女児は、写実的な絵を好むが、男児は、幾何学的な絵を好む」「（男児がまた、）女児を泣かせてしまった」等の表現である。男児は、活動的、理性的であるというイメージ、女児は感性豊かであるというイメージが、さらに、幼児が、その標準値に向かって成長しているという励ましのメッセージが保護者に伝えられる。

保育者と保護者との相互作用の中で、保護者のジェンダー観は再構築され、家庭においても、幼児がジェンダー的標準値に向かうことが、「成長」として期待されることになる。

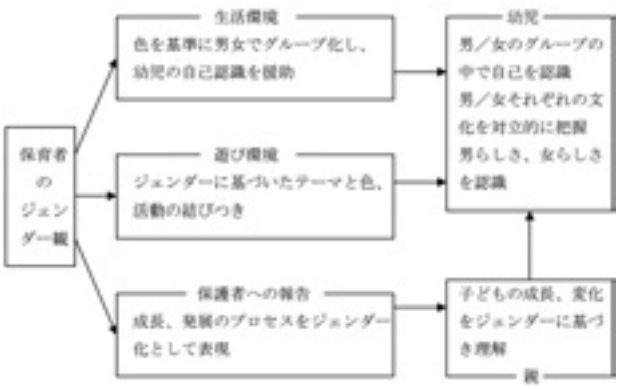

図４　保育者のジェンダー観の表象と幼児への影響

図４は、保育者のジェンダー観が幼児に及ぼす影響を事例に基づいてまとめたものである。保育者が用意した生活と遊びの環境の中で、幼児は男／女というグループの中に自己を認識するようになる。その認識を通して、幼児は男女文化を対立的に把握し、男らしさ、女らしさを習得する。また、保護者との対話において、「らしさ」という標準値に向かった成長を報告することにより、保育者は間接的に家庭における幼児のジェンダー化を導いているのである。

６　ジェンダー・フリーな保育室を目指す

保育室は、同年代の幼児が集まって社会的遊びを展開する非常に魅力的な生活拠点である。幼児は、魅力的な環境の中では、環境に主体的に働きかけて、環境の中の教育的要素を積極的に吸収する。したがって、保育環境を整える保育者は、環境の背後に潜む様々な影響力を考慮することを忘れてはならない。幼児個々の発達を考慮すると同時に、偏った価値観が入っていないであろうかと省みる必要がある。人種[21]や宗教、職業に対する偏見、そして男女に対する偏見である。

ジェンダー・フリーな保育室を目指すにあたり、（１）生活環境の整備、（２）遊び環境の整備、（３）保護者との対話の三つのシーンにおいて留意する点を指摘する。

（１）生活環境の整備

人は、自己を相対化する中で自我を確立していく[22]。男性と女性という基準は、幼児にとって最も容易な相対化の材料となる。したがって、保育者が、男／女というグループ分けを幼児の自己認識の手段として提示することは、男児が女児を他者化し、女児が男児を他者化することを助長するのである。幼児は、他者の性を排除し、他者の性と対立するプロセスの中で、自我を形成していくことになる。

したがって、グループ分けに用いられたシンボルは、獲得順に幼児によって性分類される。ピンク色と水色、花と車、おままごととゲーム等々。分類されたシンボルは、男女それぞれの自我を守る武器となっていくのである。

実際、男女の別を自己認識の手がかりとすることは、効率を考慮しても望ましくない。なぜなら、男女というグループは、時には二桁の数になり、幼児にとっては大きな集団だからである。幼児は、男女という大きなグループの中から、さらに自己の持ち物を認識しなければならない。むしろ、幼児を男女混合の小グループにわけ、それぞれに色と形象を組み合わせた目印を定めた方が、自己認識は容易であろう。

保育者には、あらゆる価値観から離れて、幼児を「個」として捉える眼差しをもつことが必要となる。

（２）遊び環境の整備

遊び環境を整備する際も、絵本やおもちゃ、その他の用具がもつ色、シンボル、性質が、幼児によって性分類されないように吟味する必要がある。幼児が個々の欲求に応じた選択をするように、色、シンボル、性質において多様性を帯びていることが望ましい。特に、色は、幼児が最初にアイデンティティのよりどころとする材料であり、その後の「らしさ」発展の足がかりとなるものである。モンテッソーリ感覚教具に、色板というのがあるが[23]、類似した性質の遊具を置き、子どもが様々な色に対して関心を抱くように配慮を講じるとよいであろう。また、「配置」にも十分な気配りを要する。ままごとコーナーは、女性の仕事場のように隔離されてはいないだろうか。ままごとという遊びを経ずして、男性の家事・育児参加を高めることは不可能である。

（３）保護者との対話

各家庭における幼児への影響は、保育者が大きく変えることはできない領域である。しかし、保護者との対話の中で、保護者の価値観が再構築される可能性があることを考えると、保育者は家庭での子育てを支えることができるのである。日々の成長報告の際には、個として発展していることを強調するように心がけ、また、クラス便りを書く折などは、「個」ととり組むことについて記すとよいであろう。

保育室と家庭の外には、あらがうことのできない

ジェンダー化されたシステムが働いているのであるが、幼児期に培った価値観は、そのシステムに屈しない確固たる根となるであろう。保育者が、ジェンダー・フリーに留意した保育環境を整えることは、人がより幸福な人生をおくることができる社会を創造する第一歩となる。

保育者には、広く社会に関する問題意識をもつこと、ジェンダーや様々な価値観について深く考える眼差しをもつことが必要とされる。保育者養成に携わる者は、保育に直接関係する知識や専門性を伝授するのみならず、社会に対する関心、及び考える力を養うことに留意する必要があろう。

おわりに　―ジェンダー・フリー社会のビジョン―

ジェンダー・フリーの社会は、どのようにして導くことができるのか。それは、ジェンダー・フリーの教育を受けた人々が、世に出ることによって可能である。幼児教育は、根の教育である。初等段階以降の教育では、ここで蓄えたものが発芽して、発展していくのである。したがって、ジェンダー・フリーの社会は、ジェンダー・フリーの保育なくしてはありえない。

さて、ジェンダー・フリーの社会はどのような幸福を人々にもたらすのであろうか。男性と女性という固定観念から解放された人々によって、性役割を固定的なものとして考える常識が崩れ、男性も女性も、その枠にとらわれずに、個として自由に人生を選びとることができるようになるのであろう。自由に人生を選びとるとは、どういうことなのか。そして、それによって社会のシステムはどのように変化するのであろうか。

植村みのりは、ジェンダー・フリーの社会について、一つのビジョンを提案している[24]。そのビジョンの中から、これらの問に対する一つのイメージを描いてみる。

①女性が男性と同様に仕事をもつことが、ごく自然の形態となる。同時に、男性が仕事をもたないという選択も可能となる。また、様々なパターンの夫婦関係が存在するようになる。同性のカップルやパートナー、異性のカップルの中でも、女性が仕事をもち、男性が専業主夫となるパターンや、男性が仕事をもち女性が専業主婦となるパターンなどである。婚姻の形態も、同居、別居様々となる。もちろん独身という選択肢もある。全てのパターンが自然な形態として成り立つようになる。

②家族のパターンが多様になったため、「扶養家族」の定義が曖昧になり、その制度を存続させることが不可能となる。税金、年金、保険が個人単位になり、「扶養家族」という言葉はなくなるであろう。収入のない子どもと老人には、国から補助が出る。

③「扶養」がなくなったため、給与は、一人一人の人間が自分一人の面倒を見られればよい額となり、基本的に低くなる。賃金に見合って、労働時間も短縮される。したがって、労働はあらゆる人々に対して保障されるようになる。雇用の際の採用条件は、ほとんどなくなり、「失業」という言葉もなくなる。

④男性主導の産業社会は、「競争」をアイデンティティとして、地域社会、人間、環境をおろそかにしてきたが、その反省として、また男女両者主導の社会となったために、人間にサービスする職業（保育者、小学校の先生、児童館員、介護士、看護師）が重んじられるようになる。このような職業は給与が高くなり、社会的な尊敬も集める。元来、女性がこの職の多くを占めていたため、女性の方が採用試験に受かりやすい。したがって「人生をシェアする」というような男性学講座が盛況となる。

これは、一つのユートピア的ビジョンであるが、ジェンダー・フリーの社会は、現代社会の行き詰まったさまざまな問題を解決するように思われるのである。ジェンダー・フリーが人々にもたらす幸福とは、まさに人間が人間らしく生きる幸福なのである。

〔注〕

1　子どもが成長し、家を巣立って行った後に、言い知れぬ空虚感を感じ、「自分の人生は何だったのか」と苦しむ人々を「空の巣症候群」と呼ぶ。彼らは空洞を埋めるために様々な行動に出る。

2　例えば、ペスタロッチは、自らの力で力強く生きる能力をもった人間こそが幸福な人間であり、教育はそのような人間となるための手段であると考えた。

3　内閣府「少子化社会に関する国際意識調査報告書」、2006年.

4　五点尺度法によって一つの回答を選択する方式である。五点尺度は、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」、「反対」、「わからない」である。57.1％は、「賛成（11.1％）」、「どちらかといえば賛成（46.0％）」を合わせた数

字である。回答者数は、日本では1,115人、スウェーデンでは1,019人である。

5　90.7％は、「どちらかといえば反対（17.4％）」、「反対（73.3％）」を合わせた数字である。

6　五点尺度法によって一つの回答を選択する方式である。五点尺度は、「もっぱら妻が行う」、「主に妻が行うが、夫も手伝う」、「妻も夫も同じように行う」、「主に夫も行うが、妻も手伝う」、「もっぱら夫が行う」、「わからない」である。66.8％は、「もっぱら妻が行う（8.9％）」、「主に妻が行うが、夫も手伝う（57.9％）」を合わせた数字である。

7　佐藤洋子『女の子はつくられる　―教育現場からのレポート』、白石書店、1984年、164頁.

8　同上、162頁.

9　同上.

10　井藤公雄、植村みのり、國信潤子『女性学・男性学』、有斐閣、2002年、90頁.

11　同上.

12　「男子、女子」という呼びかけを意識的にやめて授業をしてみたところ、ぎこちない授業になったという実験例もある。（宮崎あゆみ「学校における性別カテゴリー」、亀田温子、舘かおる編『学校をジェンダー・フリーに』、明石書店、2000年、59－77頁.）

13　苅谷剛彦、濱名陽子、木村涼子、酒井朗『教育の社会学』、有斐閣、2006年、197頁.

14　中西祐子「ジェンダーと教育」、今津孝次郎、馬越徹、早川操編『新しい教育の原理』、名古屋大学出版、2005年、139頁.

15　文部省『文部統計要覧』、2000年.
1998年度、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、短期大学、大学に占める女性教員の割合は、それぞれ、94.1％、62.2％、40.5％、24.7％、41.7％、12.3％であった。また、それぞれの学校段階における校長（園長、学長）の割合は、順に53.4％、13.8％、2.9％、2.8％、11.6％、6.2％であった。

16　佐藤洋子、上掲書、43頁.

17　1997年度教科書検定（井藤公雄、植村みのり、國信潤子、上掲書、71頁.）

18　井藤公雄、植村みのり、國信潤子、上掲書、68頁.

19　佐藤洋子、上掲書、166－168頁.

20　デビッド・マッキー（きたむらさとし訳）『ぞうのエルマー１　ぞうのエルマー』、ＢＬ出版、2002年. と、同『ぞうのエルマー４　エルマーとウィルバー』

21　外国からの移住者が増えつつある状況を考慮すれば、「表１ プレゼント作成活動の例」で準備する画用紙の「肌色」にも多様な色を用意する必要があろう。

22　乳児は、乳房を求めて拒否されたときに、自分以外のもの（＝母親）に気付き、自分の存在を意識する。（速水敏彦「パーソナリティの発達」、小嶋秀夫、速水敏彦編『子どもの発達を探る』、福村出版、1990年、96頁.）このように、乳児は、母親と自分を相対することで自我への第一歩を踏み出すのである。

23　灰、赤、オレンジ、黄、緑、青、紫、茶、ピンクの９種類の色について、それぞれ７段階の濃淡（灰色の場合は、黒から白まで）がある計63枚の色板である。幼児は濃淡の順序に板を並べながら遊ぶ。

24　植村みのり「花子さんの見た未来？」、井藤公雄、植村みのり、國信潤子、上掲書、164－179頁.